

どこか気になるヨーロッパの都市⑤

## ナポリ

——美名と悪名のメルティンゲ・ポット——

高橋 哲雄

### ナポリを見て死ねた頃

初めてナポリの名を知った少年時代から四分の三世紀経つたいま思い返すと、その間にこの都の評価はずいぶんと落ちたように思う。変わらぬのは太陽とナポリ湾の風光、ナポリ民謡（いまふうにはカンツォーネ）それに治安のわるさぐらいで、ヴェスヴィオのお山は煙を上げなくなり、あのなつかしいスパゲッティ・ナポリタンも和製の「洋食」であることが広く知られるようになった。いまや看板はピザとサッカー、せいぜいがカメラとあって、いかにもB級文化の町という落魄の感があるのはいささかさびしい。

昔はイタリア旅行といえはまずローマ、ヴェネツィア、そしてナポリに指を折った。

少なくとも十九世紀初めまではそうであって、フィレンツェもミラノもナポリの人気には遠く及ばなかった。一つには都市としての大きさ、格式があった。一八〇〇年のナポリは両シチリア王国の首都であり、人口はローマを凌いでイタリア随一。四〇万人はパリ（一〇〇万）、ロンドン（六四万）に次ぐヨーロッパ最大級の大都市であり、それだけの賑わいがあり、蓄積された文化の重みがあった。とくに港は、ヨーロッパの地中海側の玄関口として、マルセーユ、ジェノヴァと並ぶ地位を守ってきた。いまでもその面影は豪華クルーザーの寄港地として残り、船客通過数では、香港に次いで世界二位という。

ナポリのステイタスをさらに高めたのは古く重層的なその歴史にあった。とくに古代ギリシャ、ローマの遺跡・遺物に富む点で、北中

部イタリア諸都市の遠く及ぶところではなかった。その探究、ときに収集を目的にしたのが、十八世紀にイギリスの貴族の子弟の間で大流行したグランドツアーと呼ばれる大陸周遊の教養習得の旅である。彼らの社交に必要な教養はギリシャ、ローマの原郷に触れることによつて完成するものとされたからだ。旅はローマを重要な目的地としたが、次いで古代遺跡の多いナポリへ足を延ばしたのである。フランスやドイツからも知識人階級のイタリア旅行が盛んにおこなわれるようになり、その多くがナポリを旅程に組み入れた。

そうした人々の代表格がゲーテであった。

彼があこがれのイタリア行きを決行したのは一七八六年のことで、フランス革命の三年前。きわどいタイミングであった。『若きヴェルテルの悩み』ですでに文名は高かったが、まだ三八歳。久恋の地ローマへとひたすら道を急ぎ、中世の町フィレンツェには三時間しか留まらなかった。その彼がナポリではゆったりと時間を割いた。この地に遊んだのは一七八七年の二月二十五日から三月二十九日までと、シチリアからの帰途の同年五月一四日から六月三日までの、都合五〇日余りであった（フィレンツェには帰途も三日しか逗留していない）。彼の『イタリア紀行』を読むとナポリへの打ち込みぶりに驚かされる。たとえばその風景美について――

今日はこのうえない景觀を飽かず楽しんで時をすこした。人びとが何を言おうが、語ろうが、絵に描こうが、ここの景色はそのすべ

てを越えている。海辺と湾と入江、ヴェスヴィオ、町並、郊外、城塞、遊樂場！（中略）ナポリに来ると、みな気が変になるというのも無理からぬ話だと思つ。

ずいぶんと書きたてられ、褒めそやされたこの町の風光や名所については、改めて記すことはなからう。"Vedi Napoli e poi muori" と土地の人は言っている。「ナポリを見て死ね！」

（一八八七年三月二日）

大詩人の絶賛は、以来長くナポリの風景美を鑑賞する人びとの眼をつくる役割を果たした。私が初めてナポリを訪れたときも――もう四〇年以上も前のことだが――、やはり名にし負う美景にいくぶんの期待はあった。「世界の三大美港」（あと二つはシドニーとリオデジャネイロ）とか「世界の三大夜景」（あと二つは函館と香港）などとも言われてきたではないか。

しかし、この思いは簡単にしぼむ。

旧市街は物騒だからと、旧港に面した四つ星ホテルを張りこみ、そこから遊歩道を浜伝いにサンタ・ルチアアまで歩く。あの民謡で名高い魚料理屋のならば古い波止場地区である。その、ミシユランの地図で眺望印のついているあたりでヴェスヴィオ火山を振り仰いだのであるが、薄曇りのせいもあってか、遠く小さくかすみ、迫力もスケールも欠け、正直なところ何やこれという感じ。これが天下の美景なのか、むかしはこんな眺めが愛好されたのか。



遠くヴェスヴィオをのぞむナポリ

低い浜辺からではだめかと、翌日には小高いボジリッポの丘のうえの展望台からあらためて旧市街越しに俯瞰したが、岬や半島、海岸線、そして長い裾野を曳く双耳峰のヴェスヴィオと道具立てはりつぱに揃っているのだが、ありきたりの美景にしか映らない。たまたま上空をNATO最弱と噂の高いイタリア海軍機が編隊で曲乗りを繰り返して、そちらの方がよほどオペラの故郷ナポリに來たのだという気分させられた。

たぶん御坂峠からの富士山のようなもので、照れ屋の太宰治あたりからは「風呂屋のペンキ絵」とか「あまりにお詠え向きで」「恥ずかしくてならなかった」と悪態をつかれかねない完璧すぎるがゆえの不満なのかもしれない。

森まゆみ『即興詩人のイタリア』（二〇〇三）にはこうある。

まずナポリの町全体を眺める展望台に連れていかれた。右にボジリッポという金持ちの住む別荘地区、左にヴェスヴィオ山、目の前は海。「ナポリを見てから死ぬ」といわれるのも肯ける絶景である。十九世紀の絵を見ると、この前方に松が見えているのが定番。上野不忍池のめがね松みたいな名所だ。古い絵のヴェスヴィオは噴煙をあげている。いま山はずか。噴火したのは一九四四年が最後という。

「不忍池のめがね松」とは広重の「江戸名所百景」の一つ「上野山

内月の松」、めがねの縁状に変形した松を額縁にして池の向こうの町並みを描くという趣向のものである。ナポリではなくもつと南へ下がって、シチリアはタオルミナの町に持ってきたらびつたりはまるのにな、と思った。あそこは海の向こうにそびえるエトナもすばらしい（高さも三三四〇メートルとヴェスヴィオの三倍近いし噴煙もあげている）し、近景の断崖上に立つギリシャの劇場遺跡が「月の松」同様額縁として極めつけ。ゲートはタオルミナまで絶賛をとっておくべきであった。

森さんは「絶景」と一応持ち上げながらちよつぱり茶化し気味であるが、イタリア通の演劇家田之倉稔氏はもつとストレートである。

たしかにヴェズヴィオを背景に広がるナポリ市と湾の光景は、巨大な書き割のようであるが、アナクロニスティックな美観であることも事実である。このような風景は現代人の心をとらえることはできない。それはナポリのカンツォーネが大衆の支持を失い、衰弱してしまつた状態と酷似している。——類型性や「クリシエ」を拒絶する精神的風土に会つては、ナポリの風景とカンツォーネは呪術力を失つていた。六十年代はそんな時代だつた（『イタリア四季の旅』一九九四）

けれどもナポリを絶景とする見方は、一九六〇年代になつて俄かに時代錯誤になつたわけではない。もっと古い時代からそうした美学に

否定的な見方はあつた。

というより、もともとゲートとその時代の美学が相当特異なものであつた。先に触れた十八世紀のグランドツアーでももつとも愛でられた理想の風景はローマ周辺の田園風景であり、次いでナポリに近い古代遺跡を点綴する地帯であつた。それらは早くにイタリアに遊んだニコラ・プッサンやクロード・ロランの仮想的な風景画の舞台であつたのだが、彼らの絵がイギリスの貴紳たちの間で人気を博したところから、理想の「自然」の源泉として訪れられるようになり、ピクチャレスクという新奇な美学を生み出した。古代的な幻想を誘う彼らの牧歌的な絵に似た風景こそが理想美とされたのである。拳句の果ては「ピクチャレスク・ツアー」と称して、風景鑑賞の旅には「クロード・グラス」というセピア色などに着色された、魚眼レンズに近い視界の眼鏡を持参する人士が現われるほどになつた。そのグラス越しに見れば現実の風景はクロード・ロランの画面に一変するといふわけだつた。ゲートもそつした美学の影響を受けていたことを紀行中で認めている。

それと並行してこれまで畏怖の対象でしかなかつたアルプスや火山の噴火の荒々しい原始的な感覚をあたらしい美として認識する「崇高」の観念も受け入れられるようになってきた。ゲートはこのあたらしい美学にも魅かれていた。ナポリの風景の重要な構成物であるヴェスヴィオこそ、その代表的なものであつた。彼の友人の画家には満月の夜のヴェスヴィオ噴火を描いた人もいるから、もしかしたら彼も同行してこの崇高にしてピクチャレスクな光景に息をのんだかもしれない。

実際滞在中幾度も噴火中の山に登っている。もっともこれは自然科学者ゲーテにとつての興味の方が大きかったかもしれない。

### 輝くナポリの十八世紀

ゲーテはアルプスの北の人であるから、もちろん「太陽の国」の気候のよさにあこがれるところがあつたにちがいない。そもそもこの旅でヴェネツィアに寄るまで、海を見たこともなかった。ナポリと周辺は古代ローマ以来貴族の別荘地であり、十八世紀にはイギリスの結核患者が保養のため多数押し寄せた。十九世紀前半には流れがかわつてローマやピサが人気を集めるようになり、若いキーツもはじめナポリに行つたが息を引き取つたのはローマである。

結核患者ばかりではない。社交界の人士にもここはたとえようもない魅力の地であつた。その一つの中心となつたのはイギリスの在ナポリ公使サー・ウィリアム・ハミルトン（一七三〇—一八〇三）のサロンであらう。

火山学者の業績がありすぐれた美術コレクター・鑑定家であつた彼の長い在任中（一七六四—一八〇〇）に彼の館と別荘は数多の一流の文人、画家、学者を次々と受け入れた。もてなしに当たつたのはハミルトンとその愛人で後に妻となつた絶世の美人エマ（一七六一—一八一五）で、彼女はゲーテのままで古代風衣裳を身にまとい二ソフのような活人画を演じて見せ、感銘を与えている。貧困の中に育ち、一七歳ですでにロンドン社交界の高級娼婦であつた彼女は、天性の利発

さで環境の激変にみごとな適応能力を發揮し、ナポリ王国の王妃の心を掴み、外交方針にも影響力をふるうほどであつた。ナポリ王国をナポレオンの脅威から救つたために派遣されたネルソン提督（一七五八—一八〇五）はエマの魅力のとりこになり、老いたハミルトンの公認のもとに不倫関係に陥る。トラファルガー海戦でネルソンが戦死し、二人の間の子を失つてのち、彼女は生きる気力を失い、見るも無残に肥満し、浪費を重ねた末、貧困のなかに亡くなつた。

このドラマについては多くの伝記が書かれ、映画化もされた。アレクサンドル・デュマの『エマ・ハミルトン夫人の生涯』（一八六五）やアレクサンダー・コルダの映画『美女ありき』（一九四一）がそれである。主演のヴィヴィアン・リーとローレンス・オリヴィエが、作中人物になつたかのように不倫関係に陥り、のち結婚したことが話題になつた。

なかでもスーザン・ソントクの『火山に恋して』（一九九二）は恋愛ドラマのある大河歴史小説であり、エマではなく、ハミルトンを主人公に据えたのが手柄。さらに語り手の視点を次々にずらして立体的に物語を組み立てていることが歴史としての迫真性を生み出している。しかし、もう一つの主人公は当時絶えず鳴動し噴火するヴェスヴィオであり、変転常ない情勢に振り回されるナポリの町といえるかもしれない。

あたかもこの事件をもつて幕引きとするかのように、ナポリは次第に影が薄い存在となり、旅人の間でも人気を失うようになる。三六年

もナポリに留まり「住めば都」の標語を別荘の玄関に掲げたハミルトンがロンドンに去ったのは象徴的である。彼が収集した多くの美術品は大英博物館やイギリスの収集家に納められ、他方では膨大な美術品がナポレオンによって没収されてパリへ運ばれた。芸術家にとって聖地であったローマは一九世紀半ばから芸術の都の地位をパリに明け渡すことになる。

美術ばかりではない。ナポリは何といってもオペラの発祥の地であり、よい歌劇場をもつ世界最高の都であったが、皮肉なことに芸術の他分野で多くの人材に道を開いたローマ賞（一六六三年に絵画・彫刻で始まる）が一八〇三年に音楽賞を設けたまさにその頃にオペラの首都の座を滑り落ちた。オペラ通をもって鳴るスタンダードは「ナポリはもはや音楽の都ではない。それはミラノだ」と叫んだという。スカラ座が出来たのは一七七八年のことである。

美的好尚の変化も重要な要素であった。

古代の遺物・遺跡を除くと、ピクチャレスクと崇高の自然美に頼るところが大きかったナポリは、ルネッサンス、バロックの建築、美術資源も豊饒なローマとはちがって、古典主義の流行が去ると地位の低下は避けられなかった。代わって中北部の歴史都市群、とくにフィレンツェ、アッシジ、ピサなどが浮かび上がってきたのである。これらはいずれも中世、ルネッサンス、バロック、さらにはネオクラシックの各様式・時代の充実した美術・建築を抱えている点で、古代一点張りのナポリとはちがっていた。

### 日本人旅行者の視線

末永航の好著『イタリア、旅する心——大正教養世代がみた都市と美術』（二〇〇五）によると、この世代の日本人旅行者にとって、ナポリはもつとも好き嫌いの分かれる都市であったようだ。

ナポリを「イタリア中で私の一番嫌いな都会」とした美術評論家の板垣鷹穂はその理由のひとつに「寺らしい寺が一つありません」と切り捨てている。

『対するにイタリアびいきの筆頭格の有島生馬は、「ナポリにはたいして見るべきものがない」という説に反発して、「たいして見るべきものがないのか、たいしたものを見る眼がないのか」と皮肉をいい、一例として国立美術館（考古学博物館のこと）をもちあげた。

ただ、そのもちあげ方はヴァチカンの同種コレクションが「なんとなく貴族的、衛学的で、捕らわれた趣がある」のに対して、「ナポリのものは同じ王者のコレクションでも、自由で芸術的興味中心で行っているから、澀刺たる生気があっていい」と主張するもので、内容にかんするものではない。末永は「ちょっと無理な議論だけれど、こうまでナポリの肩をもつところがほほ笑ましい」と微笑する。

私も最初のナポリ訪問では真つ先に国立考古学博物館の門をくぐったのだが、奥に入ったところで、ついてくる監視人にタバコをせがまれたのはおどろいた。一本渡すとそれをポケットに入れ、もう一本と手を出す。それに応じたら、こちらへと、鍵の掛かっている部屋に招いてくれる。ほかの監視人は見て見ぬふりをしている。有島が

「自由で芸術的興味中心」というのはこのことかと何となく納得した。

この博物館は反ナポリ派からもひどく重視されているイタリア屈指の見どころであって、和辻哲郎もナポリでは、ボンベイ見学のほかはここに入り浸っていた（訪問は一九二八年、『イタリア古寺巡礼』一九五〇）。この収蔵物の中心がボンベイとエルコラーノからの出土品から成っていることを考えると、ナポリの町自体に由来する価値あるものはあまり認められなかったことになりそうである。

有島生馬を読んでいて気づいたことなのだが、ナポリ——にかぎらないが——の風景美を論じるばあい、多分注意しなければならぬポイントが一つある。彼は二度のナポリ入りではいずれも海からの道をとった。日本からの長い船旅をここで閉じたのだが、それは景観的には、われわれの陸上からの通常のアプローチとは比較にならないのではないか。

イスキアとカプリ島の二つを門柱とし、ベズビイヤはモンテ・ソムマと重なり合い、アマルフィ半島、トルレ・デル・グレコ、ナポリ、ポツオリの丘つづきにつつましやかに横たわっていた——ゆるゆるイスキア、カプリの間を通過して着岸するまでの眺望は全く言語に絶する。

もしかしたらナポリ絶景論のかなりの部分は海上初接近組によって担われたのではあるまいか。と、こんなことをいうのは、たとえば、

ヴェネツィアへの入り方の差が念頭にあるからだ。

ヴェネツィアへはおおまかには二つの入り方がある、一つは列車でサンタ・ルチア駅に降り立ち、ヴァポレットか水上タクシーで運河経由で宿に向かうものであり、もう一つは空港から海上（ラゲーン）をサン・マルコ広場に向かい、そこから宿へというものである。私は最初の二回を列車で入ったのであるが、これはよく言って勝手口、あるいは裏口から座敷に入るようなもの。印象は甚だよろしくない。正面玄関はやはり海からの道である。左にサン・ジオルジョ・マツジョーレ島の大教会の塔、つづいてサンタ・マリア・サルターテ教会に迎えられるが右に大きく回り込んで総督宮と図書館のつくるサン・マルコ広場の正面に着くというのは何とも胸ときめく瞬間ではないだろうか。私は三度目に初めてこのコースを体験して、漱石の『草枕』で画家が女に読んで聞かせた「ヴェニスに沈みつつ、水に沈みつつ」という場面がはじめてわかったような気になった。

### キリストも涙をこぼす町

ここまでナポリの魅力、とりわけ景観美のもつ時代性について考えてみた。つまり、ナポリ見て死ねと言われたほどの楽園都市でも、どんな時代、条件のもとでも美しいというわけにはいくまいということだ。

そこで今度は名声を裏返して悪名高きナポリを検分するとして、いつ頃からこの街は評判の悪い街になったのだろう。天国的であると

ともに地獄であったのだろう。どうして、どんなふうにも。悪評の所以とその中身の移り変わりはどうであったか。

正確なことはわからないとしても、相当古くからナポリは人気のある町ということになっていた。ナポリからの眺めはいいが、ナポリそのものは必ずしも好い眺めとはいえない。名物になった露地の洗濯物の満艦飾に代表される雑然とした場末風景はご愛敬だとして、しばしば汚穢、不潔、粗悪、危険、犯罪といったマイナス・イメージがつよい。つまりは住民のタチがよろしくないというのだ。

ヴェスヴィオの麓でとれる葡萄の品種を使った有名な地酒に「キリストの涙」(Lacrime Christi)というのがある。アンデルセンの小説で、わが国では森鷗外の名訳で知られる『即興詩人』のなかで主人公のアントニオをかどわかした山賊の酒盛りの場面に出てくるあれである。「キリストの涙」とはまた美しい名だが、じつはこれには言い伝えがある。天国から追放されたサターンが天国の土地の一部を盗んで逃げ去った。ところが途中でそれを落とし、そこにできたのがナポリの街で、住民は墮落し、悪事を繰り返す。天上からその行状を見たキリストがあまりの情けなさに涙をこぼし、落ちたところに葡萄の木が生えてきて、ワインが生まれた——という伝説である。ローマの皇帝も愛飲していたそうだから、それを信じるならナポリの悪名には年季が入っていることになる。

しかし、あまり遡っても意味があるまい。よく引かれるのは一八世紀、ゲーテの来訪に半世紀先立つモンテスキューの証言で、ナポリを

「地上でもっともみじめな土地」とし、住民は怠惰と極貧のなかにあって、修道院などの施して糧を得ている者が多いという印象を語っている。当時人口は三十万を越えていたが、そのうち最下層のラッツァローネ(賤民)が五―六万に及ぶと推測された(『イタリアの旅』一七二九)。

ゲーテはこれとちがった見方をとった。彼はもちろん街中でぼろをまとった人間に出会わぬことはないという事実を認めながら、さればとて彼らは怠けものではない、むしろ勤勉な人間は比較的多く下層階級の中に発見されるのであって、ラッツァローネは他階級の人間に比べていささかも怠惰ではない、ただ彼らは単に生きるためというより生活を楽しむために働いているのであって、北国人のように冬に備えて勤勉に働こうとはしないだけだと指摘する。全体として、職人は北国に比べて非常に劣り、大工場はなく、知識人は弁護士と医師以外は少なく、聖職者は安逸をむさぼり、上流人士は官能的快樂や贅沢な装い、気晴らしに明け暮れているのが実態だと。

こうした議論にはじつは現実的な背景があった。ゲーテが滞在した当時のナポリはブルボン朝のカルロス王とその後を継いだフェルディナンド王のもとに啓蒙主義的な改革が着実な成果を挙げている文化の花開く時代であった。宗教団体に課税して国庫収入をふやし、それによってカゼルタの王宮や歌劇場を造営し、ポンペイの発掘を開始して、ナポリの名を外国知識人の間に広めた。王立造船所を建設し、港湾や貧民住宅を始め都市改造に乗り出し、絹織物やマヨルカ焼、カメ

才などの手工業も育てた。一八世紀末にはロンドン、パリに次ぐ大都會になっていたことはすでに述べた。オペラの最先進都市でベルゴレージ、パイジエツコ、チマローザが活躍し、大衆劇はそれ以上のにぎわいを見せた。名のある風景画家、肖像画家がひっきりなしに来訪、滞在した。カルロス王の統治が始まる以前、後期ルネッサンス期にはすでに大学やアカデミーを中心にヴィーコ、ブルーノらの学者・思想家が出現していたヨーロッパのなかでも先進的な土地であったが、それに次ぐ文芸の大波の到来した時代であった。ゲーテはいい時代の終わりがたに訪れたのである。

しかし、ナポリの影の部分はこの時代でも解消したわけではないだろう。ゲーテはほかの人が見ない側面に観察の眼を当てただけかもしれない。

彼が去ってほぼ一世紀のちの一八七三年五月明治新政府の岩倉遣外使節団が一年半の長い欧米巡回の旅路の終わり近くにナポリに着いた。わずかに四日間の滞在であるが、久米邦武の犀利な眼光に照らされた光景は次のごとくである（現代語に移した）。

人口は四万八千七百四十人、イタリア第一の都会である。イタリアに貧民多く、ローマはフィレンツェよりひどく、ここはローマよりひどい。欧米二ヶ国の各都市をほぼ歴訪したが、ここほど清潔に乏しく、住民が怠け者で貧しい児が多いところはない。このナポリと中国の上海は同じような状況といつてもいい。土地は肥沃で美し

く物産は豊かだが、住民は久しく抑圧の政治によって疲弊し、法教の抑圧が知識を暗くしている――

一応模範となるような国を選んでの歴訪の旅とはいえ、欧米二ヶ国中最悪で上海並みと折り紙をつけられたのである。それが一八六〇年のイタリア統一から一三年目なのであってみれば、統一とは何であつたのか、統一で何が起つたのかと問いたくなる。

### 「南」のなかのナポリ イタリアのなかのナポリ

統一までのナポリの都市問題は主に周辺地域との関係にあつた。後背地に当たるカラブリア、バジリカータといった大土地所有下の極貧の農業地域からの窮乏した農民が、首都であり唯一の大都市であるナポリに流入する。それが過密を招く。最下層の吹き溜まりであるラツザローネの供給源になる。貧しい後背地が諸悪の根源の一つであつた。

カルロ・レヴィの自伝的な『キリストはエポリに止まりぬ』（一九四五）は、なぜカレジスタンス文学としてわが国では戦後早くに翻訳されたが、実際は南イタリアのもっともディープな寒村の日常の描写に終始する。

題名に出るエポリはナポリから東八五キロの小さな町であるが、そこから先はさすがのイエスでさえ足を踏み入れることのできない、いわば教化不能の蛮地と目されていたらしい。トリノの医師であり画家

であったレヴィはファシスト政権下でレジスタンス活動に入って逮捕され、エポリよりさらに一五〇キロばかり山深いマーテラ県の寒村に約一年間流されたのであるが、村内では自由に過ごすことができた。さしずめ鬼界が島といったところで、脱走など思いもよらぬ僻地であったのだろう。白茶けた土地にへばりつく村落の支配者は尊大なくせに無知、ろくな医師がいないので、マラリアは命取りの病であり、村内は護符や呪術が横行した。私は二〇年ばかり前にマーテラの洞窟住居都市までは行く機会があり、観光化されたいまはどうなっているか知らぬが、不毛の大地のたたずまいに胸を突かれる思いがあった。キリストがナポリで涙を落としたのは、化外の地から出てきた民を待ち受けたさらに苛酷な運命に涙したのかも知れない。

統一イタリアの成立は北の側から見れば「南部問題」、すなわち貧しく遅れた南がイタリア全体の発展の足かせになり、生産性の高い北の負担を増しているという問題意識になる。逆に南の側から眺めると、北という利害を異にする、異質な要素が入り込んできて、しかもそれが法律制度にせよ、経済政策にせよ、主導権を握っているのであるから、自己の利益はしばしば置き去りにされるか、ときには踏み台にされるといふ被害者意識は免れがたい。それでいて、南の大地主、大農園主は議会では強力な勢力をキープしているのであって、政府は農業面での南の権益の厚い保護に走らざるを得ない。北の工業と南の農業の同盟という側面が露呈することもときにある。反面、旧北（サルデーニャ王国）と旧南（両シチリア王国）は力の格差があり、対立し

あうことはあっても、政治的な支配と従属の関係は、基本的になかった。ブリテンとアイルランド、イングランドとスコットランドの関係のように植民地や属州に近い歴史は存在しなかった。

ナポリはその間にあつてどういう役割を担ってきたのだろうか。それを象徴的に示したのが「ナポリのマラドーナ」事件である。一九九〇年七月ナポリのサッカー場は異様な緊張に包まれていた。ワールドカップの準決勝がイタリア対アルゼンチンで行われ、そしてアルゼンチン・チームにはマラドーナの姿があった。彼はアルゼンチン人であるが、一九八四年以来ナポリに所属し、二年后にチームを一部リーグで優勝させる立役者となり、この大会直前にも二度目の優勝に導いている。一部リーグ九〇年の歴史でローマ以南のチームがチャンピオンになったのは初めてのことで、彼は奇跡を起こす人として「第二のサン・ジェンナーロ」と呼ばれた。聖ジェンナーロはナポリの守護聖人で奇跡で知られている。

このナポリの英雄がイタリア代表に立ち向かう回り合わせになった。ナポリの観衆がマラドーナを応援するか、彼を裏切り者扱いしてイタリア側に就くか。それが試合の結果以上に関心を呼んだ。試合はPK戦にもつれ込み、イタリア選手の癖を熟知するマラドーナの助言よるしきを得てか、アルゼンチンが勝った。観衆は最初戸惑いを見せながらも試合が始まるとイタリア代表に声援を送り、しかしマラドーナのプレイにも喝采を惜しまなかった。

ナポリ人の対応には考えさせられるものがあつた。イタリア代表の

主力選手にシチリアなど南の出身者が含まれていたこともあろうが、「敵の敵は味方」とばかりに憎き北への一面的な反感を示さなかったのは、それを煽りたてるような言説が横行していただけに、意外でもあった。ナポリ人らしくないと見る向きもあった。

スコットランド史の泰斗スマウトが一〇年前前日本に来たとき語ったことがある。

サッカーのトーナメントでスコットランドがイングランドに敗れ、イングランドが次に日本と戦うとすればスコットランド人は日本を応援するだろう。アメリカではそうはならない。テキサスがノースカロライナに敗れ、ノースカロライナがメキシコと戦うのであれば、テキサス人はノースカロライナを応援するだろう。

ナポリがスコットランドの反英感情ほどにも反北的でないのは興味深い。どうやらナポリは言われるほど反中央的ではないのではないか。少なくとも政治的ではないのでは。マラドーナも前日のインタビューで「ナポリ人はイタリアを応援するだろう、ぼくたちのチームにも敬意を払ってくれるだろうけれど」と語っている。ゲーテの言うとおりナポリ人は楽しみのために働き、遊びは遊びとして楽しむ心のゆたかさがあるのかもしれない。

それに比べて、その五日後のローマのスタジアムでのローマっ子の態度は露骨に政治的心情に振り回されたものであった。決勝戦はアル

ゼンチンと西ドイツとの間で行われたが、口笛と罵声でアルゼンチンの国歌は聴きとれず、マラドーナがボールに触れる度に悪意に満ちた口笛が場内に響いたという。これまで親しみを感じていたはずのない西ドイツに熱狂的な声援が送られた。まさに「敵の敵（西ドイツ）は味方」であり、「敵の味方（マラドーナ）は敵」なのであった。西ドイツが辛勝し、観衆は歓喜に包まれ、マラドーナは試合後号泣した。

※以上の経過と背景については北村暁夫『ナポリのマラドーナ イタリアアにおける「南」とは何か』（二〇〇五年、山川出版社）に詳しい。

場所が入れ替わって決勝戦がナポリで行われていたらどうだったかと考えても、ローマのようなことにはならなかったと思う。一つには「わが街の英雄」マラドーナへの愛があること。もう一つはアルゼンチンが南からの移民先として歴史的に大きな役割を果たしてきたこと。近年では逆にアルゼンチンから移民を受け入れてもいること。その意味でアルゼンチンはいわば「南の南」の役割を果たす存在であること。北から差別されてきた仲間であること。

しかし、と私は思いたいのだが、おそらくそれ以上にナポリ人の明るい屈託のなさ、いい加減さも含めての心の広さ、地震や火山活動の災害の歴史が培ってきた不確かさへの許容幅、貧乏暮らしの生むあきらめ、そつした諸々は意外にフアナティズムへの抵抗要素であるかもしれない。

じつは最初のナポリ訪問の二日目、一日の内に四回も市電のなかでスリに狙われた。

とうとうたいへんな眼に遭ったように聞こえるかもしれないが、多くの「被害者」が証言するであろうように、スリたちの間の抜けた行動、お義理がいさつ代わりのつもりかと言いたくなるほどの見え透いた手口。こちらが肘鉄を食らわせると悄然と離れた席に戻ってゆく神妙さ——そんな「原体験」が私のナポリ観に甘さを加えているかもしれない。しかし、一時的な熱狂や怒りは他に劣らぬとしても、少なくとも持続的な悪意はこの「太陽の都」には似合わない。マラドーナの事件は私にそんな思いを授けてくれたのである。